

2019年6月23日

福音書からのメッセージ

それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（ルカによる福音書9章23節）

イエス様は、一人で祈っておられました。そばには弟子たちがいたようです。そこでイエス様は弟子たちに、このように尋ねます。「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」と。「群衆は」とわざわざ言われていますから、弟子たちは自分たちが耳にしていた「うわさ」をイエス様に伝えたいだけです。それほどプレッシャーはない。「洗礼者ヨハネ」、「エリヤ」、「昔の預言者」、彼らは耳にしたことをそのままイエス様に伝えます。もしかすると彼ら弟子たちも、イエス様のことをそのように思っていたのかもしれませんが。

これらの答えを、イエス様は満足しながら聞いていたのでしょうか。「よしよし、よく分かっている」と、笑みを浮かべながら、弟子たちの答えを受け止めていたのでしょうか。そうだとすると、「それでは、あなたがたはわたしを何者だというのか」という問いはなかったと思います。人のうわさはよくわかった。じゃああなたがたはどう思っているのかとイエス様は問われます。

わたしはいつもこの場面を読むときに、自分がその場にいたらどう答えるだろうかと考えてしまいます。みなさんも少し頭に思い浮かべてください。イエス様って一体、何者なのでしょう。どういうお方なのでしょう。悲しいときに寄り添ってくれる方、つらいときに元気づけてくれる方、うれしいときに一緒に喜んでくれる方、今一つピンと来ないという人も当然おられることでしょう。

イエス様と寝食を共にしていた弟子た



ちにとって、「イエス様って何者なのだろう」という疑問は、とても身近なものだと思います。そのとき口を開いたのはペトロでした。ペトロは「神からのメシアです」と答えます。原文どおりだと、「神

のキリストです」となります。このペトロの「あなたは神のキリストです」という言葉は、「わたしはあなたのことを、救い主と信じます」という信仰告白です。

ペトロの信仰告白を聞いたイエス様は、とても大事なことを語られます。「受難予告」です。なぜこのタイミングで、イエス様はこのことを伝えなければならなかったのでしょうか。それは、ペトロが思う「キリスト」と、神さまのみ旨が必ずしも一致しない、それどころか反対を向いてさえいたからです。

イエス様は告げられます。神のキリストは、受難のキリストであると。そしてそれは神さまのみ心でした。苦しみの中にいる人のそばに寄り添い、悲しむ人と共に泣き、そして自分の力で神さまの元に立ち返ることのできないすべての人のために、十字架につけられ血を流す。わたしたちと神さまとが再びよい関係に戻るために、そのためにイエス様は遣わされたのです。

イエス様は、そのようにわたしたち一人一人に関わってくださるのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>